

「空飛ぶ医師」松本尚 VS 岡田直樹 同級生対談

救急医療の切り札 石川は空白地帯

「ドクターヘリ」―それは急病や事故で生死の境をさまよう患者の元に医師や看護師を運び、治療しながら病院に搬送する「空飛ぶ救急救命室」だ。日本最多の年間出動650回を数える日本医大千葉北総病院の松本尚ひさし医師(日本医大救急医学准教授)は石川県出身で、岡田直樹参院議員とは中学、高校の同級生。二人はドクターヘリ空白地帯の石川県にも導入する必要性を熱く語り合った。



視察の最中にもドクターヘリ出動の要請が飛び込んできた

着陸場所の確保などに力を入れるようにした。松本 同級生に熱心に取り組んでもらって、うれしいよ。おかげさまで、全国でも運用実績が広がってきた。岡田 ヘリを使った救命医療はかなり以前から叫ばれていて、阪神・淡路大震災でも事後の検証で「ヘリを活用すれば、より多くの人命を救えたのではなか」と指摘された。松本 ドクターヘリ先進国のドイツでは、一九九八年に列車事故で死者百一人、負傷者二百人を出す大惨事があったけど、三十九機のヘリが駆けつけ、半径百五十キロ以内の二十二の病院に負傷

者を搬送した。搬送した数は八十七例に上り、事故発生から二時間後にはすべての搬送が終了したとの報告がある。

ここで、消防本部から「学生が階段から転落して重症」との連絡が入り、救急チームの医師がドクターヘリで出動する。医師が駆け足で病院横に設置されたヘリポートへ急ぎ、すでに連絡を受けたヘリの整備士、パイロットがエンジンを始動し、医師が乗り込むやいなや現場へと飛び立っていった。

り、今日は四件目か。ドクターヘリがいかに地域の救急医療体制と一体化しているか、よく分かるな。松本 全国各地の自治体から、ドクターヘリの話聞きたい、実態を見たい、計画を進めたいという声がちに入ってくる。すでに導入しているのは十六道府県。全く計画がないのは石川を含めて五六県だけやね。岡田 松本尚のふるさと石川がドクターヘリ空白県だというのは皮肉

というか、さびしいね。石川県では防災ヘリを活用して患者を搬送する体制をとっているが、出動回数も少ないし、十分とは思えない。救える命が失われているケースもあるんじゃないか。石川県当局にも重要性を認識し、導入を急ぐよう訴えたい。松本 今後、ドクターヘリを導

入する自治体には、基地となるにふさわしい病院の選定や医療機関と地域の連絡調整が不可欠になるよ。岡田 石川県立中央病院などは救急、防災の拠点病院として機能強化すべきだと思う。尚とは、中学、高校の六年間、一緒に机を並べた仲だけど、互いに異なる道に進み、しかし、ふるさと石川への思いはお互いに強いものがあるね。松本 附属幼稚園から病院勤務まで含め

松本尚 おお岡田、久しぶりやな。日本医大千葉北総病院にようこそ。岡田直樹 昔のまま尚と呼ばせてもらおう。尚が主人公のNHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」(平成二十一年九月八日放送「ドクターヘリ、攻めの医療で命を救え」)を見たよ。現場に急行するフットワークの軽さや極限状態での冷静な判断力はすごいと思った。バスケット部で活躍していた尚の姿を思い出したな。松本 ありがとう。学校時代、懐かしいねえ。今回、テレビの取材を受けたのも、多くの人にドクターヘリの実際の姿や救命医療に貢献

しているシーンを見てほしかったからなんや。うちでは救急医は病院で待つんじゃない、ヘリで患者のいる現場に飛んでいく。医者「出前」みたいもんな。亡くなって当たり前と思っていた重症患者さんが助かった。そういう人が千葉にはたくさんいる。岡田 国会にいて「救急医療用ヘリコプターを用いた救急医療の確保に関する特別措置法」、いわゆるドクターヘリ法の成立に関与させてもらい、その重要性を認識した。ドクターヘリの所管は厚生労働省やけど、自分が大臣政務官を務めた国土交通省でもヘリの運用や海上保安庁との連携

と、しかも全額国費すなわち国の予算で出来た。つまり富山、石川、福井などの県民は当時、国税を通じて

ドクターヘリの配備急げ



ドクターヘリを背に石川県導入の必要性を語り合う松本尚医師(左)と岡田直樹

と、しかも全額国費すなわち国の予算で出来た。つまり富山、石川、福井などの県民は当時、国税を通じて

と、しかも全額国費すなわち国の予算で出来た。つまり富山、石川、福井などの県民は当時、国税を通じて

と、しかも全額国費すなわち国の予算で出来た。つまり富山、石川、福井などの県民は当時、国税を通じて

北陸新幹線が今、二つの石に阻まれ、前途に赤信号が灯っている。石の一つは新潟県の泉田裕彦知事であり、もう一つは民主党政権そのものだ。

れば、「もう東京―新潟間には上越新幹線があり、北陸新幹線はそれほど有り難くない。それよりも地元負担金もつたいない」。だが、これは筋が通らない。

新潟にしたのである。北陸はずいぶん遅れ、ようやく富山、石川に延びようとする今、新潟が足を引っ張るとは身勝手もはなはだしい。泉田知事が地元負担金をめぐって国と徹底的に闘うポーズを見せ、

国交省と新潟県が協議機関の設置を探る動きもあるが、その行方は定かでない。石川、富山県などから「仲間の県に迷惑をかけるな」と泉田知事に迫る必要もあるだろう。

まず着工済みの長野―金沢(白山総合車両基地)間は、岡田直樹参院議員が国土交通大臣政務官として編成した二十一年度予算、補正予算で過去最高額が計上され、平成二十六年

北陸新幹線 通らぬ新潟の身勝手 金沢以西は与党に重い責任

内金の開業は確実視されてきた。だが、ここに来て新潟の泉田知事が地元負担金の支払いを拒否し、開業遅れの恐れが大きく



政治力で引く張力、しかも全額国費すなわち国の予算で出来た。つまり富山、石川、福井などの県民は当時、国税を通じて

新潟県民の人気を得たいとすれば、国から強く押すことは逆効果のよう

今年夏までに再検討するとい